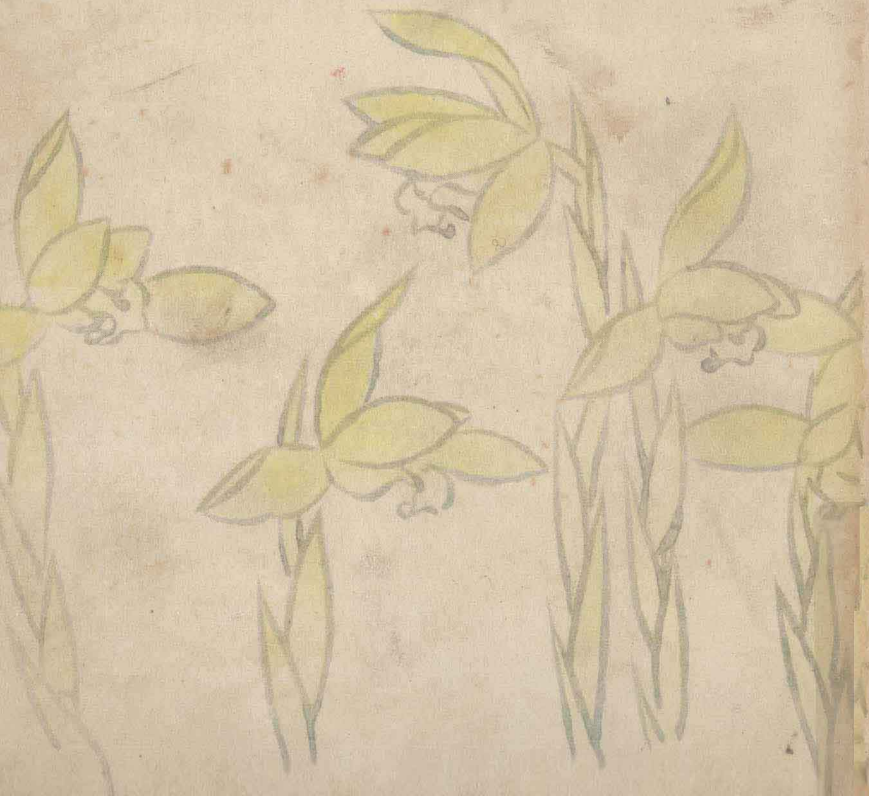
新編 西鄉隆盛

第二卷

林房雄



林　房雄著

新編　西郷隆盛

第二卷

青葉の卷
而立の卷

創元社

新編 西郷隆盛 第二卷

昭和二十七年七月二十五日 初版印刷
昭和二十七年七月三十日 初版發行

檢印廢止

定價 二二〇圓
地方定價 二二五圓

著者 林房雄
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四

發行者 小林茂
東京都中央區入舟町二ノ三

印刷者 永井直保
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
(大阪市北區樋上町四五)

發行所 株式會社 創元社
電話茅場町(66)二〇六四 四〇八三 五二六三
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

萬一落丁亂丁本がありましたら取替へます

(永井印刷・鈴木製本)

青葉の巻

第一章　鐵鞭……二
第二章　兄と弟……一一
第三章　朱房の貝……二一
第四章　正氣の歌……二八
第五章　腰間三尺の劍……四三
第六章　水上坂……五三
第七章　薩摩屋敷……六三
第八章　お庭方……七六
第九章　呪ひ釘……八七
第十章　秋冷……九六
第十一章　巨盃……一〇八
第十二章　青嵐……一二三

而立の巻

第一章　水戸組……一三四
第二章　昇平丸……一四三
第三章　常陸帶……一四九
第四章　遠山櫻……一五七
第五章　天變……一六六
第六章　地異……一七四
第七章　霜の花……一八四
第八章　三十而立……一九九
第九章　青葉時……二〇八
第十章　千里駒……二一七
第十一章　星條旗……二二六
第十二章　不知火……二三三
第十三章　舊山河……二四四

青葉の卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　鐵　鞭

靜かな夜明けである。風はない。町はまだ眠つてゐる。本堂の屋根で朝の鳥が鳴く。そのほかには物音一つ聞えない。

誓光寺の座禪石の上に坐つて、吉之助は石像のやうに動かぬ。

（靜慮！）

吐く息に合せて、心の中で繰りかへす。思ひを靜めること、靜かなる思ひ。

吸ふ息に合せて、

（無我！）

かすかな風が動いた。夜明けの微風である。石にこもつた初秋の冷氣が風にゆらぎ出て、膝に傳はり、下腹にしみた。

たちまち思ひが亂れ、心がゆらぎ、ふと見開いた視線の彼方に、白く傾いた有明け月の影が映つた。東の空の雲はもう破れたであらう。脊中には曉の陽炎がゆらめいてゐるにちがひない。

昨日讀んだ萬葉の歌をふと思ひ出す。

東の野にかぎろひの立つ見えて
かへりみすれば月傾きぬ。

（旅がしたい。……夜明けの旅。……防人（さきもり）。……海行かば……水つく屍。――いけない。雜念だ。靜慮！）

臍下の氣海に息をこめて、ふうと吐く。むうと唸る。雜念は微風の中に消えて、無念無想の快よい一瞬間。――黑漆の崑崙、夜裏に奔る。だが、それも一瞬。これでよし、と安心した途端に、心の姿勢がくづれ、ほしいまゝな聯想が水玉のやうに亂れ湧きあがる。

（崑崙の玉。……泰山の氣象。……九鼎の重さ。……齊彬（なりあき）公。……新しき政治。……薩摩は果してどうなるのであらうか？……御襲封以來既に六ヶ月。……）

いけない！　と思つたが、もう制することはできなかつた。思ひは堰を切つた水のやうに溢れ、心の匿れ岩に激しく飛沫をあげはじめた。

（新政の第一着手として、士民困窮の救濟のため、官庫を開いて藩米數千石を廉賣したが、それだけでいゝのだらうか？……窮士窮民の救恤が治國經世の根本であることは解る。……衣食足りて禮節を知る、とは先賢の教へにもある。……中齋大鹽平八郎の改革政策の第一も、食糧の分配であつた。……だが、彼の檄文には、はつきりと書いてある。墾居の我等、最早堪忍なりがたく、下民を惱ましく苦しむる諸役人を先づ誅伐いたし、引續き驕りに長じ居る大阪市中金持の町人どもを誅戮に及び申すべく候。……禮節だけで現在の薩摩が救へるか！　もつともつと、根本的な治療策こそ必要だ。――姦黨は依然として藩政の重職にとゞまり、正義に殉じた志士烈士の赦免すら未だに實行されぬ。米の値段を下げただけで、何が改革だ！　先づ、大義明分を正してこそ、まことの新政ではないか！）

その時であつた。虚空を裂いて、鐵鞭が飛來し、骨もくだけよと、吉之助の脊筋を叩いた。

「あつ！」

思はず聲をたてゝ、眼を開くと爛々と輝く二つの眼が、燃える焰の烈しさで、吉之助を睨みつけてゐた。

誓光寺の主、無參和尚である。

「吉之助、何たる態だ！」和尚の南天木の杖は石の上で激しい音を立てた。「なんといふ寢ぼけ面だ！　――お前は坐つてゐるのか、それとも眠つてゐるのか！　寢たいのなら、わざわざわしの庭に來ることは要らぬ。家の小便くさい寢床の中にもぐつてをればいゝのだ！」

身震ひして、吉之助が石の上から降りようとすると、

「降りるな。土の上に降りては、お前はまだ三尺の童子。わしと話すためには更に三尺の踏臺が要る。――坐して脚下の石に問へ。お前がこの石に坐りはじめて、既に二年になる。特にこゝ數ヶ月は毎朝缺かさず、よくも坐りに來ると感心し、この數日間、わしは木蔭に立つて、お前の坐り振りを眺めてゐたのだ。」

「……」

「石に對して恥しくないか？　近頃のお前は、石の上に坐つてゐるのではなく、眠つてゐるのだ。それもたゞの眠りではない。心は眠り果てゝ、身體は雜念妄想の惡夢に惱まされつゞけてゐる。四肢五體、眉間の皺の中にまで、混亂と動搖が現れて、靜慮と恒心の影が微塵もない。動かぬ石の上にふはふはと腰の定まらぬ風船玉が乘つてゐる――それがお前の姿だ！」

吉之助はさつと顏色を變へて、石の上に片膝を立てた。兩手の拳を握りしめて、今にも叩きかゝりさうな氣配を見せたが、やがてぴたりと石の上に兩手をついて、

「禪師、お言葉の通りでございます。私の心は亂れてをり

ます。御襲封以來、特に亂れが甚だしくなつたことが、自分でもよく解ります。どうして、さうなつたのか……それは解りません。もともと落着かぬ心でありますが、この二月、御襲封決定のときに、靜まるかと思つたが靜まらず、更に五月、御歸國のときに靜まるかと思つたのが、まだ靜まらず、その後三ヶ月、却つて動搖は增すばかりであります。……どうしたわけでございませうか？」

「それをわしに訊ねようといふのか？」

「はい、石に訊ねても答へてくれませぬ。」

「お前自身に訊ねるがいゝ。」

「解りません。」

「どうしても解らぬか！」

「解りません。」

「心の隅々まで探つたか？」

「……」

「お前の心の石の蔭には、まだ慾心といふ化物が匿れてゐる。」

「えつ、それは……いえ、そんなことはありません。私も禪師の弟子であります。私心と私慾は捨て得たかと思ひます。少くとも縣命にそれを努めてゐます。」

「では、なぜお前は齊彬公の新政に多くのことを求めるのだ？」

「えつ？」

「お前の眉間の皺の中には、新政への焦慮がありありと現れてゐる。求める心は卽ち慾心。お前は齊彬公に何を期待するのだ？　何をお願ひしようと思つてゐるのだ？」

「……」

「答へられまい。お前は一切を齊彬公に求めようとしてゐる。一切を他人に求めて、自分は石の上に坐つてゐる。いや、石の上で眠つてゐるのだ！　人に求めたのでは、いつまでも安心は得られぬ。慾を去らうと思つたら、人に求めず、たゞ天に求めるがいゝ。」無參和尙は夜明けの雲を眺めながらつゞけた。「靑空を見たかつたら、天を振り仰ぐがいゝ。いくら地面を掘つても、靑空は出て來ない。出て來るものは泥水ばかりだ。」

吉之助は困りはてたやうに首をかしげた。

「私は政治のことを考へてはいけないのでせうか？」

「誰が考へるなと言つた？」

「政治は世俗の事、慾心の源泉、――悟達の妨げではないかと思はれます。」

「馬鹿者奴！」和尙の鞭は再び石の上に鳴りひゞいた。

「悟達と恆心にとつては、俗事も超俗事もない。……わしはお前に枯木死灰になれとは敎へなかつたぞ！　……もしも禪が人間を枯木にし寒巖にし、死灰にする術だつたら、

わしは今日かぎり禪坊主をやめる。……大死一番、死中の活――泥中に靑蓮華を咲かせる生命の活法が卽ち禪だ。……政治を考へるなとは、決して敎へなかつたぞ。」

「しかし、政治のことを考へるたびに、私の心はなぜこのやうに亂れるのでせうか？」

「人心は流水の如し。――淵に淀むも水、瀨に激するも水。」

「はあ？」

「淵に到れば淀み、瀨に達すれば激す――これが水の本性であり、人の心の常態だ。……天下のことを思つて憂ひ、藩の實狀を考へて憤るのを、心の亂れとは言はぬ。それこそ心の常態だ。……心の正常な動きを亂れと思ふから、いつまでも心が靜まらぬ。正しい政治を求めて動く姿は、心の正態だ。亂れと思つてはならぬ。」

「……」

「たゞ、私心があつてはならぬ。私慾があつては、心は淀むべからざるところに淀み、激すべからざるところに激する。……わしがお前に加へた鞭は、政治のことを考へるなといふ鞭ではない。私心と慾心を叩き出せといふ鞭だ。……己のために求めるところなく、己を虛しうして、新政を願ふ心は、俗氣でもなく、世俗心でもない。――お前はもう齊彬公に上申書を書いたか？」

「まだ書きません。」

「なぜ書かぬ。――襲封早々、色々と心附かぬ點も多いだらうから遠慮なく意見を申しのべよ。上は家老から末は下役人に至るまで、我意と私悟を排し、正を踏み、上下の意志を疏通させて新政治を行ひたいと齊彬公ははつきりと布告されてゐるではないか。……石の上に坐つてゐるだけが禪ではない。早く歸つて上申書を書け。」

「上申書など書くのは、卽ち上に求むる心の現れではないでせうか？」

「形に囚はれるな。石の上に坐つてゐるつもりで、無私無慾、思つたまゝの意見を書けばいゝのだ。」和尙の眼は鋭く、そして言葉は優しかつた。「殿樣を大きな鐘だと思へ。お前は小さな撞木だ。どんな名鐘も撞木がなければ鳴りひびかぬ。思ひきりぶつつかつてみろ。鐘と撞木の間が鳴つて、新しい政治の音がひゞくだらう。……さあ、行け。もう日ものぼつた。行つて机の前に坐るのだ。上申書が出來上るまでは、わしのところに來なくともいゝぞ。」

＊

壁の中で、蟋蟀が鳴いてゐる。隙間風が膝小僧に冷たい。だいぶ、夜も更けたやうだ。

妻のお俊がそつと襖をあけて、奥の間をうかゞふと、吉之助はまだ書きつゞけてゐた。古びた机の前に、膝を崩さ

ず端座して、ゆらぐ燈芯の灯をたよりに、側目もふらず筆を運んでゐる。これで三晩目である。役所から歸ると、食事の時間も惜しんで机の前に坐り、夜は夜明け近い時刻まで書いては消し、書いては消す。

何を書いてゐるのか、お俊は知らぬ。訊ねたいとも思はぬ。訊ねたら、大きな眼で睨まれるばかりであらう。日頃は優しい良人であるが、役目のことや交友のことに就いて訊ねようとすると、急に無口になる吉之助であつた。

その癖を知つてゐるので、そつと襖をしめようとすると、

「お俊！」振りかへらずに、吉之助は言つた。「茶をいれてもらはう。」

お俊が茶の用意をして部屋にかへつて來ると、吉之助は筆を置いて、反古紙の端で紙縒をつくつてゐた。

「もう、お濟みでございますか。」

「あゝ、すんだ。やつとすんだよ。」心から嬉しさうに笑つて、お俊の間はぬ先に、「殿樣に差出す意見書だ。殿樣が僕の書いたものを讀んで下さるのだ。」

「まあ、殿樣が！」

お俊は無邪氣に眼を見張る。

「本當だぜ。——鐘と撞木の間が鳴る。殿樣が鐘で、僕は撞木だ。」

「ほほゝ、なんのことでございますの。」

吉之助がこんなに機嫌のいゝことは近頃珍しい。鐘と撞木がどうしたのか、意見書が何であるか、お俊は知らぬ。だが、良人の機嫌のいゝ顏を見ると、心も樂しくなつて、茶碗に茶を注ぎそへながら、

「それを差上げれば、きつと殿樣から御褒美がいたゞけるのでせう。」

「うん、さうは行かぬ。——場合によつては、首が飛ぶかもしれない。」

「まあ、御冗談ばかり。」

「はつはつは、首が飛ぶほどのことはなからう。但し、御褒美がいたゞけないことは確かだ。」

「まあ、そんなことで、三晩も徹夜なさつて……」

「つまらないと思ふか。」

「私には解りませんわ。」

「よしよし。では、御褒美をいたゞくことにしておいてもいゝ。——さあ、今夜はお寢み。これを綴ぢたら、僕も行くから。」

吉之助は、無參和尙の言葉の通りに、思ふことをそのまま、求むる心なく、阿る心なく、意見書の中に書きこんだのである。

意見の重點は、藩の農政の批評であつた。郡方書役とし

ての永い經驗から、百姓の辛苦と農政の缺點に就いては、言ひたいことが山ほどたまつてゐた。士族の貧困もさることながら、百姓の窮乏に至つては、見るに忍びないことが數々あつた。

*

その翌日は、近思錄輪講の日であつた。夕飯の後に、長沼嘉平の家に、吉之助、市藏、俊齋の三人が集つた。

第七卷、出處類。——輪講の當番は有村俊齋である。

「出とは家を出て官吏になること、處とは家に居つて、即ち處士として居ること。……つまり、この卷は、君子たるものゝ出處進退に就いて述べたものだと思ふ。」

俊齋は鹿爪らしい口調で說明した。いつもは下調べを怠けて、當番を嘉平や市藏に押附けてしまふ俊齋であるが、今日はだいぶ勉强して來た樣子である。

「伊川先生曰く、賢者が處士として民間に居るとき、自ら進んで君侯に對して任用を求めていゝであらうか。よくないと思ふ。……何故なら、自ら任官を求めるときは、君侯がその人の人格や才能を信用した上で任用することにはならないからである。……古への賢者——即ち孔子や孟子が、君侯の方から充分の敬意を拂ひ禮を盡して來た後に出でゝ仕へたのは、必ずしも尊大に構へてゐたわけではない。つまり、德を尊び道を樂しむ心がない君侯ならば、これを助けて善政を行ふことができないからである。……だいたい、こんな意味だらうと思ふが、どうだらう？」

と、やゝ得意氣に一座の顏を見まはした。

「よしよし、大體そんな意味らしいな。もつと先に進まう。」

「えゝと、その次は……」俊齋は懷中から書抜きを取り出して、それと讀みくらべながら、「この章は、中庸の……君子は易きに居りて命をまち、小人は險を行きて幸を求む、といふ章句と關係がある。……つまり、君子は出處進退に於て慌てない、といふことを述べてあるのだ。……ええと……君子たるものは、靜かに己を持して、時の到るのを持つてゐるものだ。志は言ふまでもなく廟堂に立つて道を行ふことであるが、しかし、たとへ一生用ひられずに終つても、慌てるやうなことはない。世に進み出る時が來ないうちに、志が動くのは、恆心がない證據である。……だが、僕はどうも、この意見には反對だな。こんな氣の長いことを言つてゐては、生きてゐる間に天下の志を行ふことはできやしない。」

「おいおい、もう議論か？」と嘉平が笑ひながら、「その先は下調べして來なかつたのだらう。」

「あゝ、して來なかつたよ。」俊齋は平氣な顏で、「これだけ調べて來れば十分だよ。書物は書物だ。昔の支那の先生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たちの言つたことを一々鵜呑みにするわけにはゆかないからな。書物の文句を材料にして、大いに論ずるのが、この會の目的だらう。だから、僕はこれだけしか調べて來なかつたのだ。」と書物と書抜きを床の間に上げてしまつた。

「よからう。今夜は俊齋の意見に從はう。」と吉之助も書物を閉ぢて、「先づ俊齋の反對論を聞かう。どの點に異議があるのだ？」

「僕は机上の空論は厭だからね。古人の說と雖も、一々我が國の現狀に照し合せて考へる。さうしなければ、論の正否は解らんと思ふ。——迫田太次右衞門殿や亡くなつた僕の父などは、この說を鵜呑みにして悠々と陋巷に朽果てた組だが、僕等若い者がその眞似をしては、薩藩の前途は困つたことになるよ。」

「迫田殿がどうしたといふのだ？」

思はず膝を乘り出して、吉之助は訊ねた。

迫田太次右衞門は吉之助の心の師である。吉之助が郡方の役所に勤め始めた頃の最初の奉行で、その薰陶は今もなほ身にしみてゐる。郡方役人の腐敗を憤つて、「蟲よ蟲よ、五節草の根を絕つな」といふ歌を壁に書殘して職を辭し、その後は雨の漏る陋屋に屛居して、詩と酒を友としてゐるさうであるが、近頃はその噂も聞かぬ。

俊齋は答へた。

「今は全く廢人と同樣です。」

「えつ、御病氣か？」

「いや、酒です。朝から晩まで酒びたりです。時には城中にも顏を出したらどうかと、友人が肩絹を贈つたら、一日だけはそれを着て役所に出たが、翌日はもう質に入れて酒に代へてしまつた。……萬事、その調子です。今年の春でしたか、僕の父が忠告するつもりで出かけたら、迫田翁はもう先客を相手に飲んでゐて、よく來た、まあ一杯、なに忠告に來た、では先づ一杯飲んでから聞くことにしよう。……父が迫田翁に別室に來てもらつて、諄々と酒の害を說くと、翁はうなづいて、あゝ解つた解つた、よく膽にしみた、なるほど良藥といふものは口に苦い、口なほしに一杯行かう、とまた飲みはじめたさうです。……かうなれば、おしまひですよ。淸廉己れを持して、野に下り、悠々自適するのも考へものです。」

吉之助は腕組みをして考へこんでゐる。俊齋はつゞけて、

「その點は、僕の父にしても、大きなことは言へないと思ひます。近藤高崎事件に憤慨し、藩廳の役人と大喧嘩をして職をやめたのはいゝが、武士はもう厭だといつて、鍛冶屋になつたり、尻枝村に隱れて百姓の眞似をしたり、大いに悠々自適のつもりだつたのでせうが、武士としての天職

を捨てると、氣力も體力も衰へるのでせう。そのうちにぽくりと死んでしまひました。――やつぱり人間といふものは、出しやばりすぎると言はれてもかまはないから、自分で仕事と天職を見つけて、いつも駈まはつてゐなければいけないのだ、と僕は思ひます。」

「お前はもともと忙しい男だよ。」長沼嘉平は笑つて、「靜かにしてをれと言つても、じつとしてをれる男ではないからな。」

「君はすぐそんな風に冷やかすからいかん。」俊齋は嘉平を睨んで、「僕だつて、近思錄の言葉は、言葉として解らないことはないよ。……善政を行ひ得る見込みのないときに、官途に就くことをあせつてはいけない、君子たるものは時期の到るのを靜かに待つてをれ、と言ふのだらう。當り前の話だ。……しかし薩摩の現狀を考へれば、そんな暢氣なことは言つてをれぬ。是非やらなければならぬことが山ほどある。……その上、日本と支那とは國柄がちがふ。支那の國柄では君子や賢人は、どこの國に仕へてもいゝ。天子は易姓革命によつて變るし、諸侯も朝に興り夕に亡ぶといふ有樣だ。君、君たらずんば、臣、臣たらずといふやうな考へ方が通用するかもしれないが、日本ではさうはゆかぬ。……第一齊彬公が我々に禮を盡し、敬意を表するのを待つて、然る後に出でゝ仕官するなんてをかしいよ。しかも、我々は孔子や孟子のやうな大人物ではないのだからなあ。」

俊齋の大袈裟で愛嬌のある話しぶりに、思はず一座は笑つてしまつた。

俊齋は不平さうに、

「何を笑ふのだ？」

「いや、あまり本當のことを言ふからさ。――なるほど、我々は孔子でも孟子でもない。」長沼嘉平はますます皮肉な口調で、「だから、我々も暮夜こつそりと碇山將曹（いかりやましやうさう）と島津豐後の門を叩いて、どうぞお願ひしますと、大いに自己推薦をやつてもいゝわけだな。」

「君はすぐにそんな風に言ふから怪しからん！」俊齋はいらいらと膝をゆすつて、「今日の薩摩は既に昔の薩摩ではない。ちやんと齊彬公が上にをられる。胸にたまつてゐることがあつたら、何でも上申せよと、言路洞開の御布告も出てゐるではないか！」

「俊齋、お前も上申書を書いたな。」

「あゝ、書いたよ。」

「なんと書いた？」

「思つたまゝのことを書いたのだ。一つ、忠邪を明らかにして、人心を一新すること、二つ、奸黨の族類を一掃すること、三つ、正義黨の志士を顯彰し、遠島謹愼中の志士を

赦免すること……」
市藏は顏色を變へて、
「えつ、本當にそんなことを書いたのか？」
「書いたよ。」俊齋は得意氣に答へた。「當然の要求ぢやないか。」
「もう藩廳に提出したのか？」
「いや、今朝書上げたばかりで、提出はまだだ。」
「それで安心した。——今、そんなことを上申しては大變なことになる。」
「何が大變だ？」俊齋は眞赤になつて、「現に君の父上も遠島中、君自身も謹慎中だ。その赦免こそ新政の第一歩ではないか！」
「いやいや、さうは行かぬ。新政にもおのづから順序がある。」
「大久保！」吉之助が叫んだ。「僕も上申書を書いたぞ。」
「えつ、君もか！」
「今朝書上げて、今朝提出して來た。」
「まさか、君は……」
「うむ、僕も俊齋と同じことを考へてゐるが、今はその點には觸れなかつた。專ら農政に關する意見を申上げた。」
「それならいゝのだ。」
「上申書を書くことに、君は反對ではないのだな？」
「勿論、反對ではない。」
「それならいゝ。僕は君たち三人に、みな上申書を書いてもらひたいのだ。君公に對して求める心なく、——卽ち己の出世や榮達を望むことなく、たゞ善き政治を願つて、意見を上申することは、是非必要だと思ふ。」さう言つて、俊齋の方を向き、「お前が、思つてゐるまゝのことを書いたのは、決して惡くないと思ふ。たゞ、奸黨誅伐のことは、今しばらく時期を待つ方がいゝのではないか？」
「なぜです？」
「それは——大久保が詳しく說明してくれるだらうが、僕としても……」
と言ひかけたとき、西鄕家の下男の熊吉が慌しく飛びこんで來た。
「たいへんでございます。早くお歸りになつて下さい。御病人が……」
吉之助は、はつとして腰を浮かせ、
「父上が……」
「いえ、御隱居樣が……」
「亡くなられたか？」
「はい。」
一座はしんとなつた。

第二章　兄と弟

不幸は友を呼ぶ。祖父九兵衞の初七日もすまぬうちに、吉之助は今一人の心の祖父を失はねばならなかつた。誓光寺の無參和尙が遷化したのである。

心の支柱が二本まで、相次いで倒れた感じである。茫然としてゐると、

「兄さん、元氣を出さうぜ。」と弟の吉次郎が勵ましてくれる。「人間、七十まで生きれば大往生だよ。お祖父さんだつて、無參和尙だつて、早過ぎたとは思つてゐないだらう。今頃は、極樂行きの峠の茶屋か何かで、仲好く待ち合せて、蓮池を眺めながら、一杯やつてゐるかもしれないよ。裟婆は苦の世界だ、もつと早く來ればよかつた、喝！なんて太平樂を並べてゐることだらうよ。」

さう言はれゝば、さうにちがひなかつた。二人とも齡は古稀を越えて、天壽を全うした安らかな死であつた。死といふよりも眠りに近い。天壽を全うした老人の死といふものは、年を經た巨木の立枯れに似て、淋しくもまた莊嚴なものである。美しく枯れた枝の下、幹のまはりには、若木たちがすくすくと生ひ繁り、勢ひよく育つてゐる。

西鄕家にも、吉兵衞夫婦、吉之助夫婦、吉次郎、信吾、小兵衞、長女のお琴は旣に他家に嫁いでゐるが、次女のお鷹と三女のお安は家にゐて、合せて九人の家族が男も女もみな達者である。

無參和尙にしても同樣。薩南第一の名知識とうたはれ、藩主の菩提寺の住職もつとめ、晩年は誓光寺に隱退して、專ら若い弟子たちを薫陶しつゝ、人々の尊信と愛慕のうちに一生を終つた。若き日の秩父騷動の志士としての和尙の精神は、禪の練りと磨きを加へて、正しく弟子たちの心に生きてゐるはずである。

そのことに氣がつけば、この打擊からの恢復はさほどむづかしくなかつた。だゞ、氣にかゝるのは、日毎に苦しさを增して行く家計のことであつた。貧乏は祖父の死と直接の關係はないはずであるが、葬式の費用にも事缺いだ內狀を知つては、吉之助は今更ながら、慌てないわけにはゆかなかつた。

「吉次郎、これからが大變だな。」

「なあに、僕たちがゐるよ。」

「しかし、父上は病氣がち、僕は僕で、まるで內を外にして飛びまはつてゐるし……」

「兄さん、氣の弱いことを言つては駄目だぜ。あんたは、西鄕家の長男だ。長男は一家のことなどかへりみず、大いに外で働いてもらはなけりやならんのだ。」

「逆ぢやないか。長男こそ家のことを考へなければならぬと思ふが……」
「ちがふよ。はゞかりながら我が西郷家は、痩せたりとはいへ、南朝の忠臣菊池武時の後裔だ。武時、武重、武光、武朝――一家一族を擧げて、大義のために斬り死したのだ。……斬り死の覺悟さへあれば、貧乏なんかなんでもないさ。」
「吉次郎、我々一家がどうやら無事で暮せるのは、みんなお前が眞黑になつて働いてくれるおかげだ。」
「殿様のおかげだと言へよ。今度の殿様は偉いぞ。百姓は泣いて喜んでゐる。――つい先き頃も、こんなことがあつた。」
吉次郎は眼を輝かせて、次のやうな挿話を物語つた。
――ある日、齊彬は近臣四五人を從へ、微行姿で、ぶらりと吉野原に出かけた。原では百姓たちがせつせと荒地を耕してゐた。齊彬は近づいて行つて、氣輕に話しかけた。
(みんな御精が出るな。何を蒔くのだね。)
(はい、麥でございますよ。)
老人の百姓は答へた。粗末な服を着て、馬にも乘らぬ、氣輕さうな侍が新藩主であらうとは夢にも思はなかつたのである。
(さうか。それにしても、ひどく荒れた畑だな。だいぶ長く手入れをしなかつたやうだな。)
(手入れどころですか。なにしろ毎日のやうに、お役所やらお役人やらの賦役々々で、自分の畑を耕すひまも、寢るひまさへもない有様で……)
(え、今も左様か?)
(いいえ、新しい殿様の御下向以來、役人の様子もいくらか變りましてな、少しは世話も行屆くやうになつたので、やつと自分の畑を起す暇もできたやうな次第です。……今年は麥だけですが、來年は唐芋も植ゑて、たらふく喰べ、長生きをしようと思つてをりますわい。)
(さうか、それはよかつた。せいぜい長生きをしてもらひたい。その間には、またいゝこともあらう。……ところでをかしなところに櫨の木があるな。日蔭も大きいし、畑の肥しも吸ひ取るだらう。切つてしまつてはどうだ。)
百姓は身震ひして、
(とんでもない。そんなことをしたら、ひどいお叱りを受けますよ。)
(ほう、耕作の邪魔になつても、切るわけにはゆかないのか。)
(あれは藩廳の財産ださうでございます。手をつけたら、首が飛びます。)
齊彬はしばらく考へてゐたが、

（さうか、役人はそれほど百姓のことを知らぬのか。――よろしい。もうお叱りをうける心配はないから、明日庄屋に屆けて切りはらつてしまふがいゝ。）

翌日、百姓たちは昨日の侍が誰であるかを庄屋から聞いて膽を潰し、そして泣いて喜んだ。

「どうだい、これで僕たちも息をつけることになつたといふものだ！」吉次郎は話し終つて、自分のことのやうに嬉しげに、「國を富ませるためには、百姓を富ませるよりほかに道はない、藩の倉庫にいくら金穀を積んでも、國が富んだことにはならぬ、といふのが、殿様の御持論だと聞いた。それを着々と御實行になつてゐるのだから、もう安心だよ。」

「さあ……果して御實行になつてゐるかどうか？」

「變だね、何かまた不平でもあるのかい。――兄さんは農政のことについて、何度も上申書を書いてゐたやうだつたが、その意見なども、ぽつぽつお採り上げになつてゐるのではないのかい。例へば常平倉のことにしても、あれは兄さんの日頃からの持論だつたらう。」

「いや、常平倉のことは、僕も考へてゐたが、上申書には書かなかつた。殿様の方から進んで御實行になつたのだ。」

「では、なほさらいゝぢやないか。」

「それもさうだ。」

事實、齊彬の藩政改革は、まだ吉之助たちを滿足させる程度ではなかつたが、着々と進んでゐたのである。

＊

改革の中で、最も眼立つたものは、十月十日に施行された常平倉制度であつた。

これは藩廳直轄の倉庫を各地に設け、武士と百姓の年收の手から一定の割合で米を買上げ、凶年で米價が騰貴したときに、廉價にその米を拂下げるといふ制度で、凶年を救ふことと、米價を安定させることを同時に狙つたものである。

制度そのものも立派であるが、特に吉之助たちを喜ばしたのは、齊彬の內命をうけて、社會義倉常平倉等の古例をしらべ、この制度の具體案を作つたのが、關勇助であつたことである。齊彬は關勇助の手腕と學殖を認め、謹愼中にも拘らず、この重要事項を諮問したのであるから、いづれは他の正義黨の人々にも同じ例が及ぼされることだらうと思はれた。

十一月には、質素節儉の令が發せられた。各自、分を守り、諸事簡略を旨とし、無益の酒會、賭け勝負は嚴禁といふ達しである。

やがて、城下の極貧者百餘人に對して、米一俵づゝが配られた。つゞいて、士族中の貧士を調査し、各戸に金一兩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.